漫画ばかり読んでると馬鹿になるよ

札幌市医師会
旭山病院
山家　研司

少年週刊漫画誌「少年サンデー」と「少年マガジン」が売り出されたのは小学３年生の時、定価30円だった。サンデーでは手塚治虫の「０マン」、マガジンでは石森章太郎の「怪傑ハリマオ」なんかに夢中になった。級友数人と鉄クズを拾い集めたお金で買い続けたけど、教室で回し読みする時は先生に見つかると「こんなものばかり読んでると馬鹿になるよ」と取り上げられるので、隠すのが大変だった。以来60年、ほとんど切らすことなく漫画誌を読み続けてきた。

高校生になった時、月刊青年漫画誌「ガロ」と「COM」が刊行された。この二誌で出会った漫画家たち、白戸三平、つげ義春、永島慎二、松本零士等の作品群は、今でもその１コマまで記憶に残っている。特に手塚治虫の「火の鳥」が描く世界のインパクトは強烈だった。医学博士でもある手塚に絵心の全くない僕が少しでも近づくには、医者になることぐらいと思って受験勉強をしていたようなものだった。

ブラウン管でのアニメ漫画ももちろん「鉄腕アトム」を筆頭に夢中になった。手塚は良質な漫画、アニメ作品を、採算を度外視して送り続け破産してしまうけど、その作品作りに携わった漫画家やアニメーターが育って日本が世界に誇れるアニメ文化を築き上げた。

さて、漫画大好き少年だった僕も、もうちょっとで70歳の爺さんだ。最近は認知機能が落ちてきて馬鹿が目立ってきたけれど、漫画ばかり読んできたので馬鹿になっていたとは思えない。

紙で漫画に出会い、ブラウン管や劇場フィルムでも漫画アニメを楽しんできた僕が最近出会ったのは、電子書籍というタブレット版の漫画。「70の爺さんが漫画かよ」と言われそうだが、これもなかなかに素晴らしい。「BLUE GIANT」（石塚真一）の主人公の大くんがジャズサックスプレイヤーとして世界に飛躍していくのを、仕事を忘れて楽しんでいる。

国稀一杯やろう会

札幌市医師会
新道東おおた内科
太田　　基

毎年３月の土曜日に、増毛の国稀酒造さんが開催している「国稀一杯やろう会」という会が、増毛のオーベルジュましけで行われている、いわゆる新酒を飲む会である。ここ数年妻と毎年楽しみにして参加している。

会場では１卓11人ほどが19卓で、200人強が料理を楽しみながら好きな日本酒をほぼ飲み放題（最後の方ではやはり純米大吟醸が在庫切れのパターン）。ただお酒は定番の鬼ころしをはじめ北酔、暑寒美人、上撰の国稀、本醸造の蔵ばしり、千石場所、純米の吟風国稀や輸出用の純米大吟醸kunimare等ほとんど全てが出てきている。

そしてこの会で一番面白いのが利き酒大会。各卓で３種類の酒の利き酒を行い、みんなでこれが大吟醸だ、いやこれは鬼ころしだ等と言いながら解答用紙を本部へ、そして結果発表！　例年この予選で正解数の多かった卓から代表者がステージへ登壇となる。

今年は３問正解が１卓しかなく、ついで２問正解が９卓ということで、まず９卓の代表１人ずつがステージへ（実は今年私たちは遅刻してしまい予選の時は参加していなかったのだが、何故か私が卓の代表として登壇することとなった）。まだホテルに着いて間もなくであったため全然飲み足りなく、舌も絶好調！　１問目、９人一斉に試飲。「この酒は鬼ころしである、○か×か？」。私は「○」。正解は「○」。ここで３人脱落となり、酒の神が降臨したのか？
なんといつもは鈍感な舌が冴えに冴え、３問連続正解し、この段階で２人になったため全問正解の卓の代表が登壇し、３人での決勝戦！　１問目、３人一斉に試飲。「この酒は上撰国稀である、○か×か？」。私は自信をもって「×」。「×」２人「○」１人。正解は「○」。この瞬間、私の狙っていた景品の大吟醸国稀1,800ml（税抜9,672円）はすり抜けていった。

このあと、閉会後はホテルの温泉につかり、部屋に戻って仲間といいだけ飲んだくれたのは言うまでもない。